

平成21年4月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 Tel0428-23-6859）

滝本の洪水防石

滝本の洪水防石は、青梅市御岳二丁目の、御岳山ケーブル下バス停すぐ下にあります。科学の進歩により、台風、地震、あるいは火山の噴火について、予知の技術が発達しましたが、被害を無くすところまでは至っていません。自然災害に見舞われるたびに「人間は自然の前では無力である」とよく言われます。洪水防石は昔の人たちが、被害を最小限にするため設けられた巨石群です。

洪水防石は、滝本川が作る谷底を横切るように並んでいます。これは、江戸時代末期の頃、6個並べられていましたが、道路改修により、現在は3個になってしまいました。

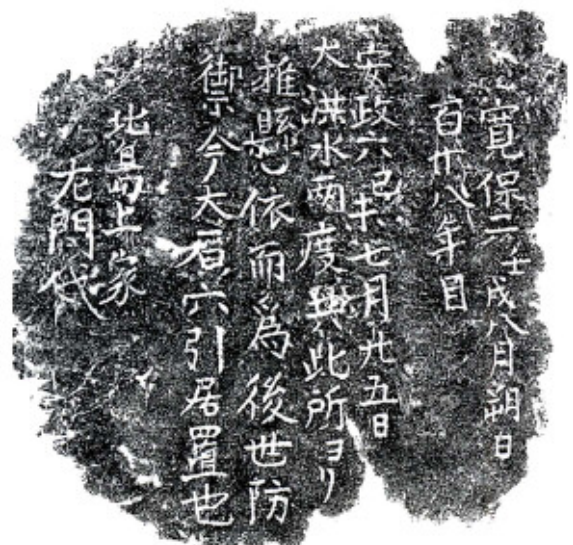
石のひとつに、銘文が刻んであります。「寛保二壬戌八月朔日^{ついたち} 百十八年目 安政六己未七月廿五日 大洪水兩度共此所ヨリ推懸 依而為後世防禦 今大石六引居置也 北島上家 左門代」と刻まれ、今でもはっきり読めます。（第1図）

碑文にある北島左門という方は、今でも洪水防石のすぐ下にお住まいの北島道宣氏の御先祖です。文政元年（1818年）に生まれ、明治27年（1894年）77歳で没しています。

古文書によると、寛保2年（1742年）8月の台風による被害は甚大で、江戸でも隅田川が氾濫するなど、関東一円に未曾有の大水害を起こしたと伝えられています。この時の水害による人々の窮状を訴えた文書が、御嶽村に残されています。滝本川も大氾濫を起こし、北島家はその洪水をまともに受け、押し流されてしまいました。

さらに118年後の安政6年（1859年）、北島家はまた同じ場所から大洪水に見舞われ、土砂に埋まってしまいました。安政6年の洪水については、滝本川下流で、御嶽村の名主を勤めた北島家に『高洪水大荒人足の覚』という古文書が残されています。「滝本西家（北島左門家のこと）掘出人足覚」には「八月二日 拂沢中野滝本惣立曾 長家の床 庭を掘申候 是は不残一同助合に四十一人出申候」とあります。近隣の人々が、人足として復旧にあたった様子がわかります。

この2回の水害に懲りた北島左門は、安政の大洪水直後、6個の大石を川から引き上げ、2度の洪水が進入した道筋に立て並べ、水害を永久に防ぐ大工事を完成させ



第1図 洪水防石の拓本

ました。その記念として、文字を石に刻んだのです。

現在残っている洪水防石の、最大は高さ2.8メートル、長さ5.1メートル、巾3.5メートルもあります。川底から引き上げた状況については、次のように言い伝えられています。

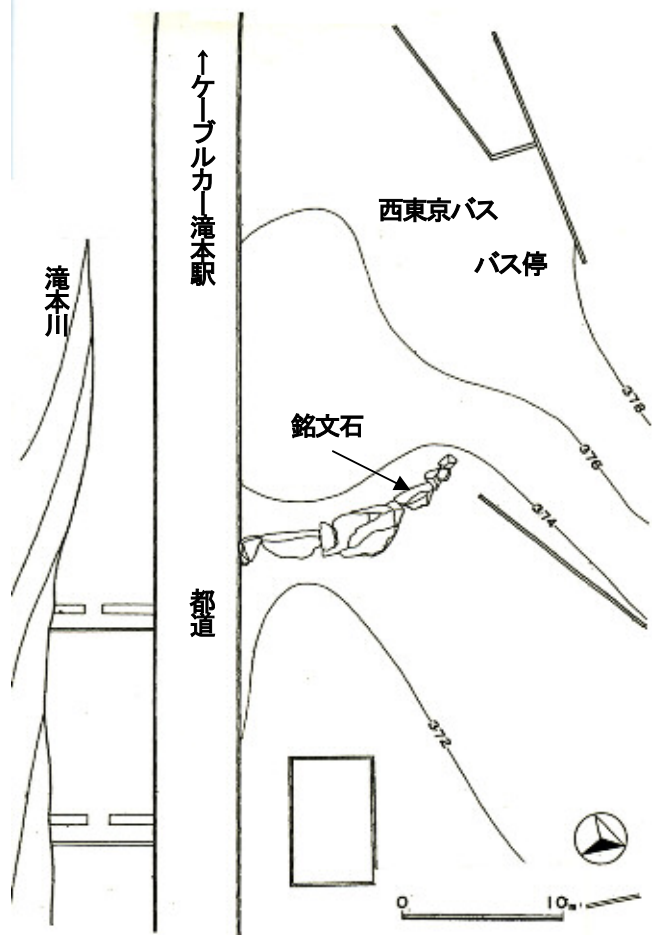
最初左門は、黒^{くろくわ}鋤と呼ばれていた土木技術者に仕事を頼んだが、どうしても大石を川から引き上げることができず、旅の黒鋤は夜逃げをしてしまったという。そのあと地元の「あくとの万蔵」という土木巧者が仕事を続け、立派に完成させた。現在の北島家の大石垣も、明治時代の万蔵の仕事で、高度な技術は今も残されています。

安政6年から今年で150年、この間に何度も大きな台風に襲われました。しかし、道路の改修や砂防工事などで滝本川の河床は低くなり、被害を受ける恐れはなくなりました。100年以上も前の水害を教訓とし、「備えあれば憂いなし」を後世に伝える貴重な石の遺構です。

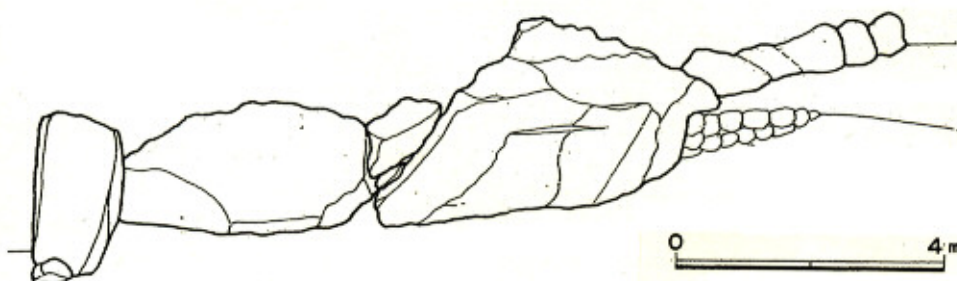
「滝本の洪水防石」については、昭和15年、地元の郷土史家清水 利 が雑誌『多摩史談』八巻一号に寄稿しています。近年では、青梅市文化財保護審議委員齋藤慎一先生が『多摩のあゆみ』百二十八号で紹介しています。

調査にあたり、実測・拓本は郷土博物館久保田正寿課長、浅田 武 主任に御協力いただきました。

(文責 小島 みどり)



第2図 洪水防石の位置



第3図 洪水防石の実測図